

死者儀礼テーマに論議

臨床宗教師のケアに質問集中

宗教の力を探る

佛大総研
シンポジウム



様々な立場の識者が、死者儀礼をめぐって論じ合った

死者儀礼に焦点を当て、現代社会の中での宗教の力を探る佛大総合研究所のシンポジウムが、他、災害ボランティアな

どの現場で宗教者が宗教を前面に押し出すことができない矛盾も話題になった。パネリストは安藤礼二・多摩美術大准教授、池上良正・駒沢大教授、鈴木宥弓・東北大教授の3氏。池上氏は死者供養に「生者たちのために死者が存在する」「死者たちのために生者が存在する」という二つの補完的な心意があるとした上で、現代は「私の傷をどう癒やしていくか」というように、生者中心の方向に死者供養が強化されていると分析。「死者の都合を考える世界観から、生きている者だけがこの世界の住民であるかのような世界観」へ変容を遂げていくことを懸念

した。

コメンテーターの大谷栄一・佛大教授の「生者と死者の関係性を、公

共性の観点から捉えることはできないか」との問いに、池上氏は靖国問題などを念頭に置きながら

「死者を含んだ公共性が成り立ち得るとしたら、どういった危険性があるか、どういった注意が必要

になるか、研究者は事例に即して丹念に説明していくべきだ」と応じた。鈴木氏は臨床宗教師に

ついて経緯や現状を説明。臨床宗教師が行う心のケアの特異性について

「宗教者は自分自身の他を育む必要があると話した。」

(丹治隆宏)

界観を持っているからこそ、他の人が異なる他界観を持っていることに共感することができる」と強調した。

会場からは、臨床宗教師が行う布教ではない心のケアに質問が集中。鈴木氏は「宗教は価値の志向」だとし、「価値を志向する宗教者が、他の価値にどうして寄り添えるのか」という矛盾が臨床宗教師の活動に付きまとうが、こうした矛盾を踏まえながらも、異質なものを認め、寄り添う姿勢を育む必要があると話した。